



2009 CIK-FIA ワールドカップ カートレース IN JAPAN

2009 CIK-FIA WORLD CUP KART RACE IN JAPAN

鈴鹿サーキット 国際南コース 1.264km

2009年5月

22日(金)・23日(土)・24日(日) ファイナル

- 開催クラス : CIK-FIA WORLD CUP FOR SUPER KF & KF1 / CIK-FIA ASIA-PACIFIC KF2 CHAMPIONSHIP
- 同日開催 : FP-Jr
- オーガナイザー : 鈴鹿モータースポーツクラブ(SMSC)
- プロモーター : 株式会社 モビリティランド
- 公認 : 国際カート委員会(CIK) / 国際自動車連盟(FIA) / 社団法人 日本自動車連盟(JAF)
- 後援 : 鈴鹿市 / 鈴鹿商工会議所 / 鈴鹿市観光協会 / 鈴鹿モータースポーツ市民の会 / カートメーカーインポーター協会(KMIA) / 日本カートランド協会(JKLA) / 日本選手権オーガナイザー会(JKOA) / 一般社団法人SLカートスポーツ機構(SLO)
- オフィシャルパートナー : CRG JAPAN / 株式会社スピードレーシング / トニーカートジャパン株式会社

未来のF1をみざす若き精鋭たちが今年も鈴鹿に結集！ 国際南コースでのバトルに世界中の目が注がれる！！

これまで、数々の名勝負を生み、同時に頂点のF1にまで上り詰めた数多くの逸材を輩出してきたCIK-FIAワールドカップ カートレース IN JAPAN。その歴史的な舞台となってきた鈴鹿サーキット国際南コースに、今年も世界中からえりすぐりの精鋭たちが結集することになった。

メインのSKF(SUPER KF)クラスには弱冠17歳、イタリアの若手有望株リボール・トマンが参戦する。トマンは昨年もワールドカップ カートレース IN JAPANに参戦し、2位表彰台を獲得。今年は優勝をその視野に入れて臨んでくる。また日本勢でも期待の精鋭が出場。昨年ヨーロッパで武者修行し、今年から全日本選手権に参戦している石山岳はまだ16歳だ。昨年全日本選手権KF1クラスのチャンピオンを獲得すると同時にFCJ(フォーミュラチャレンジ・ジャパン)にも参戦し、今季FCJ開幕戦で初優勝を飾るなど波に乗っている

佐々木大樹も優勝を狙って参戦する。

一方、そう簡単には勝たせない立ちはだかのがベテラン勢だ。昨年2勝目を飾ったイタリアのダビデ・フォレ(35歳)を筆頭に、昨年3位入賞のサウロ・チェセッティ(イタリア=33歳)、さらには25歳のマルコ・アーティゴ(イタリア)らが、今年も参戦。彼ら強豪ベテラン勢と若き精鋭たちの戦いは、まさに世界が注目する1戦となった。



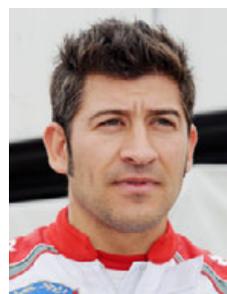
リボール・トマン



佐々木大樹



ダビデ・フォレ



サウロ・チェセッティ



マルコ・アーティゴ

ゆうえんち入園料でご覧いただけます。(※各日とも1日のみ有効)

料金(ゆうえんち入園料)		
大人 (中学生以上)	子供 (小学生)	幼児 (3歳~未就学児)
1,600 円	800 円	600 円

お車で越しの方は、ゆうえんち駐車場に駐車いただき、無料シャトルバスをご利用ください。

【無料シャトルバス】

■運行区間:正面ゲート⇄国際南コース

■運行日程:5月23日(土)・24日(日)

株式会社 モビリティランド 鈴鹿サーキット

〒510-0295 三重県鈴鹿市稲生町7992

TEL(059)378-1111

URL <http://www.suzukacircuit.jp/>

究極のハイスピードバトル！ 初登場のSKFクラスに強豪、新鋭が大挙エントリー！



現在F1を始め、国内最高峰のフォーミュラ・ニッポンなどのトップカテゴリーに参戦しているドライバーの多くが、レーシングカートからそのレースキャリアをスタートさせている。現在世界各国で様々な選手権シリーズが開催されているが、それらの上に位置するのがアジア・パシフィック選手権、ヨーロッパ選手権、そして頂点が世界選手権となる。CIK-FIAワールドカップ カートレースは、この世界選手権と並ぶ格式を誇る世界最高峰レースで、1991年から鈴鹿サーキット国際南コース(2000年はツインリンクもてぎで開催)で開催されてきた。

今年も世界最高峰の名にふさわしい熱戦が展開されるはずだが、2年前のレギュレーション変更がその戦いをさらにハイレベルなものにした。これまでのFAクラスがKF1クラスとなり、エンジン排気量は100ccから125ccへとアップし、その性能は驚くほど向上。今年はこのKF1クラスをさらにチューニングしたSKF(SUPER KF)クラスが日本初開催となった。有力選手のほとんどが今年SKFでのエントリーとなり、これまでにないハイスピード、そしてハイレベルな戦いが展開されることになる。

F・アロンソに続いてL・ハミルトンもF1チャンピオン獲得！ ワールドカップ カートレース制覇が頂点へのスタート

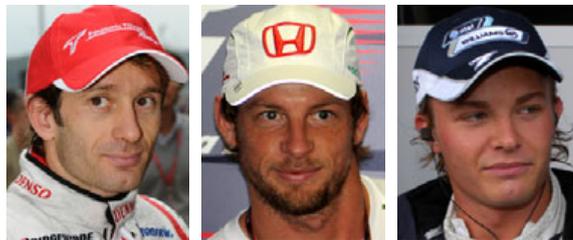


フェルナンド・アロンソ ルイス・ハミルトン

昨年F1世界選手権でマクラーレン・メルセデスを駆って見事チャンピオンを獲得したルイス・ハミルトン。05年にミハエル・シューマッハと激しい戦いを展開した末にチャンピオンを獲得、翌06年も王者に輝いたフェルナンド・アロンソ。彼らF1の新しい王者には大きな共通点があった。ともにCIK-FIAワールドカップ カートレースで頂点への第一歩を印したことだ。

アロンソは1998年に出場。この年は豪雨に見舞われ決勝レースは中止となったが、予選ヒートでトップを獲得するなど、速さの片鱗を見せつけた。一方ハミルトンは舞台をツインリンクもてぎに移して行われた2000年に見事優勝を飾っているのだ。

他にもワールドカップ カートレースは数々のF1ドライバーを輩出してきた。94年、95年と2年連続優勝を飾ったヤルノ・トゥルーリは今季もトヨタのエースとしてF1に参戦。今季ブラウンGPチームから参戦し、現在チャンピオンシップポイントトップを独走しているジェンソン・バトンも96年FAクラス3位表彰台を獲得。ウィリアムズチームのニコ・ロズベルグも2000年(もてぎ)に参戦して活躍している。やはりワールドカップ カートレースはF1を目指す者にとって重要なレースなのだ。今年も日本はもちろんのこと、世界中から精鋭たちが結集する。



ヤルノ・トゥルーリ ジェンソン・バトン ニコ・ロズベルグ

2年連続フォーミュラ・ニッポンのタイトルを獲得した松田次生も、 元F1の山本左近も、新鋭伊沢拓也も ワールドカップ カートレースからステップアップ



山本左近

これまでワールドカップ カートを経験してステップアップした日本人選手も数多くいる。スーパーアグリチームからF1参戦の経験を持つ山本左近も99年、00年に参戦。昨年フォーミュラ・ニッポン史上初の2年連続チャンピオンの偉業を達成した松田次生も97年、98年に参戦しているのを始め、アメリカ、インディカーシリーズで活躍した松浦孝亮は97年FAクラスに参戦して見事優勝を飾っている。他にも昨年フォーミュラ・ニッポン、SUPER GT参戦を果たした新鋭の伊沢拓也もワールドカップ カートレースを経験してその後のステップアップに勢いをつけた。海外からの精鋭はもちろんだが、日本国内の若手選手の走りからも目が離せないものとなりそうだ。



松田次生

WORLD CUP KART RACE IN JAPAN リザルト(トップ3)

年	コース	クラス	優勝	2位	3位
1991年	鈴鹿サーキット国際南コース	FK	D・クレバレス	D・ロッシ	李 好彦
		FA	D・スミス	金子 雄一	D・アンドレ
1992年	鈴鹿サーキット国際南コース	FK	D・ロッシ	M・リタプリス	C・ヘルベルグ
		FA	A・フェデモンテ	A・ベリッキ	道上 龍
1993年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	N・ジャンニベルディ	G・フィジケラ	J・トゥルーリ
		FA	P・モロ	L・コーシオ	大脇 照男
1994年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	J・トゥルーリ	A・マネッティ	N・マツジョ
		FA	L・カサーザ	D・フォレ	J・デグートゥ
1995年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	J・トゥルーリ	松谷 隆郎	津田 浩次
		FA	D・ウェルドン	佐藤 雅洋	F・G・フラガス
1996年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	M・オルシニ	C・バリストレリ	G・ベツジョ
		FA	M・パプロビック	G・パンターノ	J・バトン
1997年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	佐野 和志	G・ベツジョ	李 好彦
		FA	松浦 孝亮	J・コートニー	R・アンティヌッチ
1998年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	松谷 隆郎	G・パンターノ	C・バリストレリ
		FA	※豪雨のため決勝レース中止		
1999年	鈴鹿サーキット国際南コース	FSA	V・リウツツィ	E・ガンドルフィ	佐野 和志
		FA	J・ボンシェ	A・ドス・サントス	F・ベレラ
2000年	ツインリンクもてぎ 北ショートコース	FSA	D・フォレ	V・リウツツィ	C・バリストレリ
		FA	L・ハミルトン	C・ピッチオーネ	C・ブラウン
2006年	鈴鹿サーキット国際南コース	FA	A・コズリンスキー	J・ピアンキ	R・クリストッポール
2007年	鈴鹿サーキット国際南コース	KF1	M・アーディゴ	服部 竜也	G・キャッツ
2008年	鈴鹿サーキット国際南コース	KF1	D・フォレ	L・トマン	S・チェセツティ